



Kobe Shoin Women's University Repository

KARASHI-DANE

## 狭衣物語卷四本文系統再考(二) : なぐさの浜

著者	片岡 利博
著者別名	KATAOKA Toshihiro
雑誌名	文林
巻	44
ページ	25-50
発行年	2010-03-10
URL	<a href="http://doi.org/10.14946/00001586">http://doi.org/10.14946/00001586</a>



## 狭衣物語卷四本文系統再考（二）

—— なぐさの浜 ——

片岡利博

本稿は、『文林』第四十二号（二〇〇八年三月刊）に発表した「狭衣物語卷四本文系統再考——かたしきにかさねぬ衣——」の続稿である。その前稿に先立って発表した「狭衣物語卷四の本文系統——蓮空本の異文をめぐって」<sup>（\*）</sup>では、蓮空本卷四の本文をもって第三系統とする三谷栄一氏の説を批判して、「現在知られている諸本の卷四の本文はいずれも、第一系統か第二系統、そうでなければ両者の混合・混態になることが明らかなるものばかり」であり、三谷氏が第三系統本文として示された蓮空本の異文のほとんどは単なる誤写の結果とすべきものであって、現時点では卷四には第三系統とすべき本文は認められないことを述べておいた。前稿はそれを承けて、氏が「第一・第三系統同文」としてあげられた諸例のうちのひとつ（卷四之中にある「かたしきにかさねぬ衣……」の歌の前後の本文）を対象として、卷四の諸本の本文のありようを分析したものである。その結果判明したことをここで整理しておく、

（1）種々の異本を派生させる基になった本文は、卷四の当該箇所においては、版本や内閣文庫本に代表される流

布本系本文と、京大五冊本のような異本系本文である。

(2) 上記二種の本文を基にして、四種類の異なる混合・混態本文が派生している。

(3) 従来、第二系統本文（異本系本文）とされてきた為秀本・大島本は、異本系本文（京大五冊本のような本文）に流布本系本文を混入した混合本文にすぎない。

(4) 巻四の当該箇所では、(1) に示した二種の本文以外には、異本の生成に関与した本文（第三系統）の存在は確認できない。但し、それが存在した可能性まで否定すべきではない。

の四点である。本稿では、巻四之中の最終章段にある「おほかたは身をや投げまし見るからになぐさの浜も袖濡らしけり」の歌の前後の本文を分析する。

一

版本狭衣物語巻四之中的の最終章段。源氏宮の形代として式部卿宮の姫君（宰相中将妹）を手に入れた狭衣が、齋院御所に源氏宮を訪れてこのことを報告するくだり。流布本系本文を版本により次に掲げる（私に句読点、濁点等を施した。さらに、後に述べるところとの関連でフレーズを切って表示し、符号を付けてある）。

【流布本】 「(B) 誠や、人しれずこゝろひとつに思ふ給へあまる事こそ侍りつれ。(E) あらぶる神もことはりしり給ふわざに侍るなればにやとは思ふたまへながら、(F) 中々なるかたしをこそ見給へしか。(G) いでや、

されど、しばしわするゝこゝろは神もつきたまはぬわざにや。今すこしあやかりやすにぞ成て侍る。(I) 空めにやと、いかで御鏡のかげに御らんじくらべさせん」とて、うちほゝゑみたまへるけしき、(J) 「大貳がいふとて、うへのゝ給ひし人の事にや」ときかせたまへど、御いらへもなければ、(K) うぢなげきつゝ、

大かたは身をやなげまし見るからになぐさのはまも袖ぬらしけり

(L) とて、はては例の忍びがたげにもらしいで給ふ涙のけしきに、又書つくしこゝろづきなふおぼしなられて、(M) 猶ねぶたげなるけしきにもてなして、ふさせ給ひぬるに、中く何しにきこえさせ出つらんと、くやしうおぼす。(版本・卷四之中・五二ウ)

狭衣が源氏宮に向かつて、宰相中将妹を手に入れたことを、まずは遠回しな言い方で「人知れず心ひとつに思い余っている事がある(B)」と告げ、「神が同情してくださったおかげだとは思ふものの(E)、この形代を得たためにかえってあなたのことを忘れることができにくくなった(F・G)。本当にあなたに似ているかどうか、あなたの目で確かめてほしい(I)」と冗談めかして説明すると、すでに堀川上から話を聞いていた源氏宮はそのことかと思ひ当たるが、返事もしてくれない(J)。そこで狭衣は嘆きながら「大方は……」の歌を詠む(K)。涙ぐんでいる狭衣を見ていると、源氏宮は例によって不快な気分がこみあげてきて(L)、臥してしまったので、狭衣は、余計なことを言わなければよかったと後悔した(M)、というのである。

よく知られているように、狭衣物語の本文研究において、流布本と異なる本文を有する本として常に重要な役割を

果たしてきたのは深川本（西本願寺旧蔵本）であるが、その深川本には巻四が欠けている。そのため、深川本の代わりとしてこれまで内閣文庫本がひろく用いられてきたのであるが、不都合かつ不可解なことに、巻三まで一貫して深川本と同系統の本文を有し、流布本本文と対立し続けてきた内閣文庫本が、巻四だけは流布本とほとんど変わりのない本文になっているのである。このことが巻四の本文研究を紛糾させた経緯についてはすでに詳述したところであるが、最近では、深川本の代用として平出本や為定本を用いるむきも現れてきている。しかし、平出本巻四の本文は内閣文庫本と同じく流布本系本文であり、為定本も、流布本系本文をベースにしてできた混態本文とおぼしく、深川本の代用として内閣文庫本や平出本、あるいは為定本を用いることは、現時点ではなんら根拠がないといわねばならず、その妥当性もはなはだ疑問であるといわねばならない。

さて、三谷氏の研究とは別に、共通異文の数量化によって狭衣物語諸本の本文分類を試みられたのが中田剛直氏<sup>(\*)3</sup>であるが、中田氏の研究結果によれば、巻四において流布本とまったく多くの異文を有する本は、氏が第二類本とされる為秀本と大島本である。その為秀本文を次に掲げる。（これも私に句読点、濁点等を施した。さらに流布本と対比しながらフレーズを切って表示し、本文が流布本とほぼ一致する場合には先に流布本本文に付した符号と同じ大文字の、また、異なる場合には小文字の符号を付した。）

【為秀本】（a）すこしほゝゑみて、（B）まこと、人しれず思ひたまへらるゝことこそ侍れ。（c）きかせたまふことや」とのたまへば、（d）御心のうちには、「なにごとぞや」とおぼすに、「かの大にがいひける人のことにや」

とおぼせど、「なにごとぞや」とて、のたまはすることもなければ、うちなげかれて、(E)「あらぶる神だにこと  
 はりはしりたまふことゝきゝ侍を、(f) あるまじき心のうちなをるまじくは、しばしわするゝかたにとねんじ侍  
 に、ある人の、いみじきかたしろなど申しかば、わざとたづねて見侍れば、つくりそこなひて侍ける。(G) 中  
 くゝいますこしあやかりやすにて、しばしわするゝ心だにゑかなひ侍らず。(h) 大になどは、いみじう見にせた  
 てまつるも、(I) ひがめにやと、いかで御かゝみのかげにも御らんじくらべさせばや」とて、うちほゝゑみて、  
 (j) 涙はひとめうけ給へる、あい行はこぼるゝ心ちして、(K) うちなげきつゝ、

おほかたは身をやなげまし見るからになぐさのはまもそでぬらしけり

(I) いふともなくくちずさみ給ふ気色、めでたくなまめかしけれど、もらしいでたまふ涙、あな心づきなどのみ  
 きかせたまへば、かひなかりけり。(M) なをねぶたげなるさまにもてなして、ふさせたまひぬるも、中くゝな  
 しにきこへさせつらんと、くやしうおぼす。(一一六ウ)

この為秀本文には、流布本にはなかった(a)(c)(d)(h)がある。また、(f)(j)(l)は、それぞれの  
 前後のフレーズが流布本と一致するのでとりあえず同じ符号を付しておいたけれども、本文内容はまったく違ったも  
 のになっているので、違っていることを示すため小文字で表示した。この箇所の中本のフレーズの対応を示してみ  
 と、

【為秀本】	a		【流布本】
	B		B
	c		
	d	}	
	E		E
	f		F
	G		G
	h		
	I		I
	j	J	
	K		K
	l		L
	M		M

となる。(B)(E)(G)(I)(K)(M)は両者が共有する本文であるから、共通祖本に存在した本文であると考えられる。

さきに見たように、流布本の (B・E・F・G・I) は一続きの狭衣の会話文であり、狭衣のこの言に対する源氏宮の反応が (J) に語られていたのであった。ところが、為秀本では、狭衣の会話文が (B・c) と、(E・f・G・h・I) の二つに分かれており、その二つの会話文の間に、源氏宮の反応を述べる (d) が割り込んだ形になっている。為秀本の (d) は、「人しれず思い余っている事があるのですが、お聞きおよびでしょうか」との狭衣の問いかけ (B・c) に、源氏宮は即座に「大式が言っていたあの人のことだろうか」と思い当たったものの、返事をしなかった、と語るものである。流布本では、狭衣のかごとがましい長々とした説明 (B・E・F・G・I) を聞いたあとの (J) で、源氏宮はおもむろに、「大式が言っていると大宮が話しておられた人のことだろうか」と思い当たった、というふうになっている。為秀本の (d) は、叙述内容からすれば、実は流布本の (J) に相当するものである。そして、このように同じ内容の叙述の位置が大きくずれていることによって、源氏宮という人の性格が両本の間でかなり異なったものに見えてくる。すなわち、流布本の源氏宮はずいぶんおおやうで、狭衣の話にはほとんど無関心であるように見えるのに対し、為秀本の源氏宮は、狭衣の問いかけに即座に反応する利発で神経質な女性という印象を

受けるのである。なお、為秀本の（j）は「涙はひとめうき給へる、あい行はこぼるゝ心ちして」とあって、狭衣の優美な有様を述べたものであり、流布本にはみられない叙述である。

さて、ここで注目したいのは、引用本文中に二重傍線と波線をほどこした「ほほゑみ」と「なげき」である。流布本では、狭衣が冗談めかして「微笑み」ながら言ったにもかかわらず、源氏宮が何も答えてくれないので、狭衣は「うち嘆」いて歌を詠む。いっぽうの為秀本では、狭衣が「微笑み」ながら尋ねたのに源氏宮が何も答えてくれないので狭衣は「うち嘆き」、さらに長々と経緯を説明し、冗談めかして「微笑」んだものの、涙を浮かべながら「うち嘆」いて歌を詠むという次第で、為秀本本文は、まったく文脈がたどれないというわけではないが、「ほほゑみ」と「なげき」が不自然に重複して、流布本に比べると、狼藉の観を免れない。

これは、流布本のような本文こそがもとの形であって、為秀本本文はもとの本文の（j）を（d）の位置に移動させたために、このような乱れた文章になったのであらうと思われる。このように（j）が前に飛び出してしまつと、残された（I）末尾の「うちほほゑみ給へる気色」と、（K）の「うち嘆き」が連続してしまうことになり、それは文意が通らなくなる。そこで、その疵痕を糊塗するために、狭衣の「うちほほゑみ給へる気色」を具体的に描写した「涙はひとめうき給へる、あい行はこぼるゝ心ちして」というフレーズが作文され、挿入されたのではないかと推測されるのである。為秀本のような本文が先で、それが流布本のような本文に書き換えられたとは考えにくい。

次に、流布本と為秀本が大きく異なっている（F）と（f）を検討してみる。流布本の（F）は「中々なるかたしるをこそ見給へしか」というきわめて簡略なものであった。それに対し、為秀本の（f）では、「源氏宮へのあるま



じき思いが止まないものなら、しばらくの間でも源氏宮のことを忘れさせてくれるような女性に会わせてほしいと神に念じていたところ、ある人が、源氏宮にとてもよく似ている女性がいると知らせてくれたので、わざわざその人に会ってみたけれども、出来損ないだった」と、形代を得た経緯を長々と説明している。狭衣が宰相中將妹にめぐりあった経緯は巻四之上〜中においてすでに語られてきたことであり、その経緯が再度ここでくり返されているのである（但し、「いみじきかたしろ」として仲介者が狭衣に紹介した、という叙述は、これまで物語が語ってきた内容に必ずしも合致しないが、これは、源氏宮の思惑を憚る狭衣に、事実を歪曲した嘘を言わせているのであろう）。

このように、すでに語られたストーリーを要約、あるいは詳述する形で再度くり返す傾向は、この箇所に限らず、狭衣物語異系統本文の本文改変における特徴のひとつとってよいようである。その典型的な例として、筑紫から帰京した道成が飛鳥井女君との出会いの経緯を狭衣に語るくだり（巻二之下）をあげておく。

【流布本】 見初めし有様よりはじめ、乳母の心合はせて盗ませしほど、

【大島本】 一昨年の五月に太秦に簞りて侍りしに、かたはらの局のすまひをかしうなむ候ひしかば、よろづに構へて覗きはべりしに、高き御目にやいか侍らむ、道成の妻にはいとをかしげに侍りしかば、誰と知りて、出でむに尋ね取らむと思ひ給へしに、法輪にあからさまに詣でて候ひし間に出で候ひにければ、口惜しう思ひ給へしに、この大宮そこそこなる家に、局なる童の候ひしを見つけて侍りしかば、帥の中納言の娘にてぞ候ひける。親たち筑紫にて失せにける後、乳母を頼もし人にて候ひけるに、藏人の少将、ときどき通はれけるを、女はあひ思ひて侍りけ

れば、下りさぶらひし曉、乳母、心合はせて取らせて侍りしを、

流布本文が地の文できわめて簡略にかたづけられているところを、大島本では、卷一で語られていた飛鳥井女君物語のあらすじを再度道成に語らせている。この箇所については、大島本のような長大な異文のほうが原形であると誤認されていた時期もあるが、その認識が誤りであることはかつて詳しく論じたので、ここではくり返さない。

流布本にない異文（h）「大式などは、いみじう見似せたてまつるも」も、これと同工である。狭衣の乳母大式が、宰相中将妹を一目見るなり、源氏宮に似ていると思ったことは、

大式、近く参り寄りて、御几帳のかたびら引き上げて見れば、御ふすまの下にうづもれて、人おはすとも見えぬに、御ぐしばかりぞ、こちたげにたたなはりゐて、いと所せげなり。「いで、よも、なにごとものめにおはせん人を、かくまでもてなし給はじ」とは思ひつれど、うち見るは、なほおどろかるれば、寄りて、引きのべて裾うちやりたるに、「まことに、おくれたる筋なしとはこれをいふにや」と見えて、取る手も滑るつや、筋のうつくしさなどの、斎院の御ぐしにいとよく似たまへり。「長さぞ、まだ少し劣りてやと見ゆるは、御年のほどにしたがひたまへるにや」と見るに……

あるいは、

大式の参りたるに、上、「まことか。さることや」と問ひたまへば、「…(中略)…御かたちなどこそ、いとよき御あはひに見えさせ給へ。斎院にぞあやしきまで似奉らせたまへる」など語りて…

としてすでに語られていたところであり、これらの箇所は為秀本でも流布本とほぼ同文になっている。為秀本の異文(h)は、これらを利用して作文、挿入された底のものであろう。

次に、流布本と為秀本が大きく異なるもう一つの箇所(L)と(1)について考えてみる。両者の叙述内容を較べてみると、為秀本の(1)の前半部分「いふともなくちずさみ給ふ気色、めでたくなまめかしけれど」と、末尾の「かひなかりけり」に相当する部分が古活字本の(L)にはないようである。「めでたくなまめかしけれど」は、(j)と同様、狭衣の優美さを述べ立てただけの叙述であるが、「いふともなくちずさみ給ふ」と「かひなかりけり」については少し検討してみる余地があるように思われる。

そもそも、「おおかたは…」の歌は現行諸注において解釈が定まっていない。まず、新編日本古典文学全集(以下、『新全集』と略す)が初・二句を「普通なら身を投げましょうか」(三三七頁)と訳しているのは誤りである。用例を拾ってみれば明らかなように、和歌における「おほかたは」という歌句は、例外なく「よくよく考えてみれば」の意を表すのであって、日本古典文学大系(以下、『大系』と略す)が「よくよく思い返してみれば、私は身を投げて死んでしまったものだろうか」(四二二頁)とする解が正しい。

したがって、三句目以下「見るからになぐさの浜も袖濡らしけり」は、身を投げて死んでしまったほうがよいと考

える理由が述べられているとすべきである。「見るからに」は、見た途端に、の意であるが、『大系』はこれを直接「なぐさの浜」にかけて「ただ見ただけで心がなぐさめられるなぐさの浜」と解き、日本古典全書（二四二頁。以下、『全書』と略す）や新潮日本古典集成（三〇六頁。以下、『集成』と略す）はこれを第五句にかけて「貴女を見ただけで、たちまち袖を濡らしてしまいました」と解く。さらに、諸注いずれも「名草の浜」に「慰」を掛けると解くが、『大系』『新全集』はこれを源氏宮の比喻とし、『全書』『集成』は宰相中将妹の比喻としている。「名草の浜」は紀伊国の歌枕で、

・ 跡見れば心なぐさの浜千鳥今は声こそ聞かまほしけれ（後撰集・恋二・六三五）

・ 紀伊の介に侍りける男のまかり通はずなりにければ、かの男の姉のもとにうれへおこせて侍りければ、いと心うきことかな、と言ひつかはしたりける返事に

紀伊の国のなぐさの浜は君なれや言のいふかひありと聞きつる（後撰集・雜三・一二三三）

・ 声をだに聞けばなぐさの浜千鳥古巢忘れず常に訪ひ来よ（古今六帖・一九二九）

のように、「慰む」の掛詞とするのが通例であるので、『新全集』が「お顔を見るやいなや慰めかねて思わず涙がこぼれるのです」と訳しているのはやや奇異な感じがするが、「お顔を見るやいなや（慰むはずなのですが）慰めかねて……」と解したのであろう。

流布本本文によれば、狭衣が、「形代として宰相中将妹を手に入れたが、あなたを忘れることはできないばかりか、かえってあなたを思い出させる結果にしかならなかった」と意中を訴えたにもかかわらず、源氏宮からは一言の返事もないので、狭衣は嘆きながらこの歌を詠み、果ては涙までこぼし始めたので、源氏宮は嫌悪感を覚えた、となっている。こうした文脈の中に位置づけて考えるなら、この歌は、思い余った狭衣が、宮に向かって重ねて苦衷を訴えたものと解すべきであろう。したがって、歌意は、「あなたの御姿を見るや否や、なぐさの浜（＝形代である宰相中将妹）も慰めにはならず、私は袖を濡らしてしまったことです。よくよく考えてみれば、私はいつそ浜に身を投げて死んでしまったほうがよいのかもしれない」となる。歌の内容は、切羽詰まった感情を激しく吐露し、（和歌の常套的表現とはいうものの）自死までのめかす、やや脅迫めいた口調すら感じさせるものである。だからこそ、狭衣は堪えきれずに涙をこぼすのであり、また、それに恐れをなした宮が「またかきつくし心づきなう思しな」るのである。ちなみに、ここに「また、かきつくし」とあるのは、巻一之上で狭衣から初めて意中を訴えられたときの場面に、

よしさらば昔のあとをたづね見よ我のみまよふ恋の道かは

とも言ひやらず、涙のほろほろとこぼるるをだにあやしとおぼすに、御手をさへとらへて、袖のしがらみせきやらぬけしきなるに、宮、いとあさましようおそろしうなりたまひて……

とあったのなどを重ねて読むべきなのであろう。ともあれ、「おほかたは」の歌は、流布本本文によれば、狭衣の激

しい感情を源氏宮にぶつけた歌であって、為秀本のいうように「いふともなくちずさみ給ふ」というようなものはありえないのである。

いっぽう、為秀本の場合は、狭衣が微笑みながら訊ねても一言の返事もしてくれない宮に向かって、形代を得るに至った経緯を長々と説明し、なお微笑みながらも目一杯涙を浮かべて溜め息まじりにこの歌を「いふともなく口ずさ」んだ、となっていて、ここには流布本のような緊迫感はまったくない。狭衣は微笑みを浮かべながら、「形代を得ても、宮の姿を見た途端に涙ぐんばかりいる私は、いっそ死んでしまったほうがいいのではありませんか」と、優美さを漂わせつつ呟く、といった体である。それでも源氏宮は、涙ぐみながらそんなことを言う狭衣に対して冷淡にも「あな心づきな」と思い、嫌悪感しか覚えなかったというのである。

それに続いて、「かひなかりけり」とあるのはやや難解である。かつて巻一で衝動的に意中を告白して宮に嫌われしてしまった、あのときの失敗に鑑みて、今回は「いふともなく口ずさ」むようにそれとなく心情を訴えてみたものの、やはり「かひなかりけり（不首尾に終わった）」とでもいうのであろうか。あるいは、これはいわゆる引歌表現で、上に掲げた後撰集一二三番歌を踏まえて、後撰集の女の場合は『言のいふかひ』があったけれども、狭衣の場合は「かひなかりけり」だ、といっているのであらうか。明確な解を得ないが、いずれにせよ、流布本の狭衣に比べると、為秀本の狭衣は緊迫感が希薄で、どこか余裕（あるいは諦め）を感じさせるところがあり、対する源氏宮の反応は過剰に潔癖でヒステリックな印象を受ける。

以上、流布本本文と為秀本本文を比較しつつ見てきた結果、為秀本は、狭衣と源氏宮の人物造型や二人の関係につ

いて流布本とは異なつた捉え方をしており、為秀本の異文はそうした異なる解釈に基づいて改作された本文であると考えらるべきことが判明したわけである。巻四では、流布本（中田氏のいう第一類本第二種）の本文（三谷氏のいう第一系統本文）が原型に近い本文であり、為秀本や大島本（中田氏のいう第二類本）のような本文（三谷氏のいう第二系統本文）が非本来的な本文であることは、事新たに述べ立てるまでもなくすでに定説化しているところである。本節は、そのことを、当該箇所<sup>(\*)</sup>の解釈を交えて再確認してみたにすぎない。しかしながら、上記二本以外の本の本文を視野に入れてさらに見直してみると、為秀本や大島本の本文をもってそれをただちに改作による異系統本文と認定してよいかどうかは、疑わしくなってくる。次節では、これ以外の本文にまで視野を広げて、この問題について考えてみたい。

## 二

三谷氏は「狭衣物語巻四の後半における諸伝本と巻末における跋文の意義について——三系統存在から二系統へ——」<sup>(\*)</sup>においてこの箇所をとりあげ、「第一・三系統はほぼ同文」（四七九頁）とされ、「この系統に属するものとして、内閣文庫本・平出本・流布本・近衛一本・池田四季本・鈴鹿甲本・桂宮本・東大平野本・蓮空本・図書寮三冊本などがある」（四八〇頁）とされた。ただ、なんとも不可解なのは、続いて第二系統本文（大島本）を紹介したあとに、「これに対して伝為家本、伝為相本、保坂本などは第三系統を形成して」として後掲の為家本に似た本文を掲げ、「……とあって、やはり大きく相違するのである」（四八〇頁）と述べておられる点である。「第一・三系統はほぼ同文」という先の言説と、「伝為家本、伝為相本、保坂本などは第三系統を形成して、……大きく相違する」というこの言説

は、矛盾以外のなにものでもない私には思われるのだが、氏のいわれる「第三系統」とはいったどの本文をさしているのだろうか。ちなみに、同じ三谷氏の手になる、未刊国文資料『九条家旧蔵本 狭衣物語と研究（下）』（昭和三十八年九月）に示された巻四の伝本系統表（二三〇頁）では、この箇所とおぼしき部分（有朋堂文庫四八三頁の欄）について、内閣文庫本、近衛一本、流布本、東大平野本、鈴鹿甲本に第一系統であることを示す a の記号、伝為家本、保坂本、図書寮三冊本、蓮空本に第三系統であることを示す c の記号が記されていて、この伝本系統表の所説と前記論文の所説も、また齟齬している。

三谷氏が論中に第三系統として掲げておられる本文はどの本に拠ったものか定かでないが、私見によれば、掲出された本文にもっとも近いのは中田氏が第一類本第一種 C とする為家本の本文である。次に為家本本文を示す。（私に句読点、濁点等を施し、各フレーズに前節で用いた符号を付けておく。）

【為家本】（B）「まことに、心ひとつにひとしれず思ひ給えるゝことこそ侍れ。（e）このごろ、『たゞすこしもおもひよそえつべからむ人をまれ、みせさせ給へ』と、神ほとけをかこち申ししにや、（F）中くなる人かたをこそ見給しか。（G）いでや、されども、しばしもわするゝころは神もえかなへ給はぬわざにや。いますこしあやかりやすにぞなりて侍。（I）そらめにやと、いかで御かゞみのかげ御らんじつくらせさむ（f）とて、うちほほえみ給へるけしき、（J）「だいにがいふとて、うえのたまひし人の事にや」ときかせ給へど、御いらへもなければ、（K）うちなげかれて、



おほかたは身をやなげましみるまゝになぐさのはまも袖ぬらしけり

(L) とて、れいの袖はしのびがたげにもらしいで給なみだのけしきに、心づきなくおぼされて、(M) ねぶたげなる御けしきにもてなさせ給ぬる、中く／＼なにしにきこえいでつらんと、くやくおぼさる。(二一六オ)

流布本とおおきく異なるのは波線をほどこした (e) で、それ以外の部分は流布本とほぼ同文と見なしうるものである。この唯一おおきく異なる波線部の異文は、宰相中将妹に出会うことができた理由を狭衣自身が推測して、「ほんの少しでもあなたに思ひよそえることができるような人に出会わせてくださいと、神仏に愚痴を申し上げたかったのだろうか」と述べるものである。この異文は (B) と (F) の間に位置しているので、流布本の (E) に相当すると考えられるが、流布本の (E) は、「あらぶる神も物事の道理はご存じだとのことゆえ、(形代に出会えたのは) 神の導きかとは思ふものの」と述べていたのであった。両者を比べると、措辞がまったく異なるだけでなく、形代である宰相中将妹についての評価にも微妙な差が生じている。流布本では、宰相中将妹との出会いは必ずしも肯定的に受け止められておらず、形代はかえって物思いの種にしかならないとする (F・G) の叙述のほうにウェイトがかかった口振りになっているのに対し、為家本の異文 (e) は、宰相中将妹との出会いをとりあえずは肯定的に受け止めているような口振りになっている。

為家本のように、(e) だけが流布本と異なっている本としては、このほかに、中山本 (中田氏不採用)、蓮空本 (第一類本第一種 H)、鎌倉本 (中田氏不採用)、為定本 (中田氏不採用)、為相本 (第一類本第一種 E) がある。但し、為相本は

「(G) いでや、さりとんしばしはわするゝ心は神もえつけ給はぬにや。(H) そらめにや。いかで御かゞみのかげも御らんじくらべせん……」となっていて、二ヶ所の「にや」の目移りによるものでもあろうか、「いますこしあやかりやすにぞなりて侍る」が脱落した形になっている。

ちなみに、三谷氏の論では、蓮空本・図書寮三冊本が流布本本文と同文とされ、「第一・三系統はほぼ同文」と認定されていたのであるが、それは事実誤認であって、蓮空本はこの為家本と同文であり、図書寮三冊本（第一類本第一種G）も中山本の末流本であるとの報告がすでになされているから、これも為家本と同類とすべきである。すなわち、三谷氏が論中「第一・三系統はほぼ同文」とされたのは誤りであって、この箇所に関しては、流布本のような本文（第一系統本文）や為秀本のような本文（第二系統本文）のほかに、これらとは異なる、第三の本文を有する為家本、中山本、蓮空本、為相本、為定本のような本文が存在するのである。これら三種類の本文の各フレーズのありようを見やすい表にしておく。

【為秀本】	a		
	B	B	B
	c		
	d		
	E	E	e
	f	F	F
	G	G	G
	h		
	I	I	I
	j	J	J
	K	K	K
	l	L	L
	M	M	M

この表から明らかなように、為家本本文は、流布本のような本文（第一系統）と為秀本のような本文（第二系統）の

混合によって生じた本文であるとは考えられない。なぜなら、流布本の (E) と為秀本の (E) は同文になっているにもかかわらず、為家本の (e) は、それとは異なる独自の異文になっているからである。三谷氏が、「伝為家本、伝為相本、保坂本などは第三系統を形成して、……やはり大きく相違するのである」と言われたのはそのとおりなのである(ただし、保坂本は為家本や為相本のような (e) を有してはおらず、流布本本文と同様の本文になっているから、ここに保坂本をあげるのも事実誤認である)。

このように見てくると、巻四にも第一・第二・第三の三系統の本文が存在する、という三谷説が成り立つように思われるのであるが、この箇所にはさらに次のような本文も存在していることを見逃してはならない。

【京大五冊本】 (a) すこしほゝゑみて、(b) 「まこと、心とまるありさまと」(c) きかせ給事や侍らん」と申給

へば、(d) 「何事ぞや」とおぼしめす。「かの、大ニがいひける人のことにや」とおぼせど、「何事にや」とて、ともかくもの給わする事もなければ、うちなげかれて、(E) 「あらぶる神だにことほりはしり給物ときゝ侍しは。

(f) あるまじき心の内なをるまじうは、しばし忘るゝかたにとねんじ侍るを、ある人の、いみじきかた代になどきゝ侍りて、わざとたづねて見侍れど、つくりそこないてぞ侍りける。(h) 大ニなどは、いみじう見にせ参らすこそ、(i) かたわらいたけれ」とて、(j) 涙うきながら、さすがにうちゑみ給へる、あい行こぼるゝ心ちす。

(K) うちなげきつゝ、

大かたは身をやなげまし見るからになぐさのはまも袖ぬらしけり

(1) いふともなく口ずさみ給ふけしき、めでたうなまめかしけれど、心づきなうのみきこしめすはかひなかりけり。(M) 猶ねぶたげなる御けしきにもてなして、ふさせ給ぬるも、中く／＼きこゑさせんと、くやくおぼす。(第四冊・一七オ)

中田氏が第一類本第一種Aとした京大五冊本の本文である。この本文は、為秀本文（三谷氏のいう第二系統本文）に近いが、為秀本の（G）を欠いており、波線をほどこした（b）（i）（j）も為秀本とは異なっている。京大五冊本は、全巻通じて他本との間に多くの小異を有し、概して書写の精密さに欠ける本といわねばならないのであるが、いま指摘した四箇所は異同は京大五冊本筆者の不注意な書写によるものとは考えられない。なぜなら、これらの異文はすべて、中田氏が、第一類本第一種Bとする鈴鹿乙本や書陵部四冊本の「兄弟本というべし」<sup>(\*)8</sup>とされた雅章本にも共有されているからである。

順次、これらの異文を検討してゆく。まず、（b）の「まこと、心とまるありさまと」であるが、これは雅章本では「まこと、心ことなるありさまと」となっていて小異がある。流布本文の（B）「誠や、人しれずこゝろひとつに思ふ給へあまる事こそ侍りつれ」と、為秀本文の（B）「まこと、人しれず思ひたまへらるゝことこそ侍れ」の間にも小異があるが、この違いは誤写によって生じたとも見ることができよう。しかし、これら（B）と、京大五冊本や雅章本文の（b）の間にはかなりの径庭があって、これは意図的な改変と考えざるをえない。京大五冊本も雅章本も、（b）の次に（c）「きかせたまふことや、とのたまへば」が来ているので、その点では為秀本に近いわけであ

るが、為秀本の(B)は、流布本の(B)と同様、宰相中将妹を迎え入れたことを言い出す前に、「人知れず思い悩んでいることがある」と、まず現在の自分の心境をうち明けるところから狭衣は話を切り出していたのであった。ところが、京大五冊本の異文(b)は、宮に向かって、「そうそう、私が気に入りの女性を見つけたと(お聞き及びでしうか)」と、宰相中将妹との結婚を聞き知っているかどうか、ダイレクトな言い方で宮に問い質している。雅章本の(b)「まこと、心ことなるありさまと」の場合は京大五冊本よりやや婉曲な言い方にはなるが、「これまで源氏宮一人を思い続けて独身を通してきた自分が、これまでとは異なるありさまになったこと」と言っているわけであるから、京大五冊本と同様、宰相中将妹との結婚を言っていることには変わりはない。狭衣がそこまではっきりと問い質しているにもかかわらず、源氏宮は「何のことですか?」とすら訊ねてくれないので、(E)以降、狭衣は言い訳をし始める、というふうに展開していく。

(E)以降は京大五冊本も為秀本文とはほぼ同様の展開であるが、為秀本にあった(G)「中／＼いますこしあやかりやすにて、しばしわするゝ心だにゑかなひ侍らず」が京大五冊本の本文には欠けている。(G)の前後(f)(h)は為秀本とほぼ一致するから、これは京大五冊本筆者の不注意な書写による脱文と考えられなくもないが、必ずしもそうとも限らず、(G)の欠落は(i)の異文と関連があるようにも思われるのである。この点について、さらに掘り下げて考えてみる。

為秀本では、「あなたのことを忘れたいと思っている私に、ある人が、源氏宮によく似ている人がいると教えてくれたので、わざわざ会ってみたのだが、出来損ないだった。(G)それどころか、なまじ少し似ている人を迎え入れ

てしまったものだから、かえって始終あなたを思い出すことになって、しばし忘れることさえできないような結果になってしまった。大貳の乳母などはあなたにとてもよく似ていると言うのだが、見間違いかどうか、あなた自身の目で見比べていただきたい」となっている。迎え入れた形代は、紹介者や大貳乳母が似ているというだけあって全然似ていないわけではないが、「作り損ない」であって、とうてい満足できるようなものではない、と、為秀本の狭衣は言っていたのである。対する京大五冊本は、「あなたのことを忘れたいと思っていたところ、ある人が、源氏宮の身代わりに、と言ってくれたので、わざわざ会ってみたのだが、出来損ないだった。大貳の乳母などは、あなたにとてもよく似ていると言うのだが、笑止千万だ」と言い切っている。京大五冊本の狭衣は、形代は出来損ないであって、源氏宮にはまったく似ていない、と断言しているのである。<sup>(9)</sup> 形代はまったく源氏宮に似てはいない、と思っている狭衣が、為秀本や流布本のように「(I) ひがめにやと、いかで御かゞみのかけにも御らんじくらべさせばや」などと言わず、「(i) かたわらいたけれ」と断言するのと同様、「(G) なかなかいますこしあやかりやすにて、しばし忘るる心だにえかなひ侍らず」などと言う道理もないわけである。このように見てくると、京大五冊本における (G) の欠落は、あえてこれを削ったものと考えたほうがよいように思われるのである。

京大五冊本の狭衣は、「宰相中将妹を迎え入れたことをすでお聞き及びかもしれないが、その形代はまったく源氏宮には似ておらず、満足できるようなものではない。私はあなた以外の人では満足できないのだ」と、源氏宮に訴えているのである。その狭衣が (j) 「涙浮きながら、さすがにうちゑみ給」うのは、訴えても無駄だということを重々承知しているがゆえの、諦めの「涙」と「ゑみ」なのであろう。先に述べたように為秀本文は「ほほゑみ」と

前節では、三谷氏が第一系統・第二系統とされた本文とは異なる、第三の本文（為家本）と第四の本文（京大五冊本）をみてきた。これらの本文の各フレイズのありようを今一度整理しておくこと次のようになる。

【京大五冊本】	【為秀本】	【流布本】	【為家本】
a	a		
b	B	B	B
c	c		
d	d		
E	E	E	e
f	f	F	F
	G	G	G
h	h		
i	I	I	I
j	j	J	J
K	K	K	K
l	l	L	L
M	M	M	M

この表をあらためて眺めてみると、この箇所においては、三谷氏のいわれる第一系統（流布本のような本文）と第二系統（為秀本のような本文）の対立よりも、為家本と京大五冊本の対立のほうがより激しく、為秀本本文も流布本本文も両本の中間的な形態に過ぎないように思われてくる。巻一、巻二の本文研究においてこれまでに確認されてきた知

見によれば、狭衣物語の本文には、原形態を比較的よく伝えている本文と、それを改作してできた本文とがあって、その後、それらをさまざまに混合してできた数種の本文が存在する、というのが狭衣物語諸本の本文のありようであった。諸本のうちのどの本文をもって原形態を比較的よく伝えている本文と考えるかについては、三谷氏と私とは正反対の考え方をしているのであるが、錯綜する諸本の本文を、基本となる二―三種類の本文とそれらの混合本文、として捉える考え方は、三谷氏も私も一致している。その点は、狭衣物語の諸本を第一類本と第二類本とに大別する中田剛直氏の説とも通じるのであって、管見の限り、狭衣物語の多様な本文について、これ以外の格別な考え方は現時点では提出されていない。

その考え方に従うならば、この箇所のできあがり本文はゆるい異系統本文ではなくて、京大五冊本のような異系統本文をベースにしながら、部分的に流布本のような本文に差し替られてできた混合本文と考えざるをえない。

また、為家本文を流布本文と比べてみると、(e)の部分だけが異なっている。この(e)がどこからもたらされたものであるのかが明らかでない現状では、前稿において原形態をよく伝えるものと認められた版本をはじめとする流布本文もまた、為家本文の(e)だけを異系統本文の(E)に差し替えてできた混合本文とせざるをえない。ただし、前稿でも述べておいたように、いまだ発見されていない本で、京大五冊本や流布本とは大きく異なる第三の本文を有する本が巻四にも存在した可能性は否定すべきではない。もし今後そのような本が発見され、その本文に異文(e)が存在していたならば、為家本のほうが流布本系本文と第三系統本文の混合になるものと考えねばならないことになる。当面は、その可能性も皆無ではないということだけは念頭に置いておく必要があるであろう。



四

以上の考察に基づき、この箇所の諸本の本文を整理しておく。今回調査対象とした諸本のうち、同文を有する諸本名を示し、その本が中田剛直氏の諸本研究にも採り上げられている場合は、それぞれの所属をへ内「1-A（第一類本系統第一種A）」のように略して付記しておく。

【基幹本文】

○為家本〈1-C〉の本文「原態を保っているとおぼしき本文」……為相本〈1-E〉・中山本・蓮空本〈1-H〉・鎌倉本・為定本（但し、為相本は（G）に若干の脱文がある）

○京大五冊本〈1-A〉の本文「為家本のような本文を大幅に改作してできた本文」……雅章本

【混合本文】

○流布本の本文「為家本本文の（e）の部分だけを京大五冊本の（E）に差し替えたもの」……前田本〈1-D〉・龍谷本〈1-F〉・神宮文庫本〈1-F〉・内閣文庫本〈1-A〉・宝玲本〈1-A〉・東大平野本〈1-B〉・新宮城本〈1-B〉・慈鎮本・黒川本〈1-D〉・古活字本〈1-E〉・版本〈1-E〉・刈谷図書館村上本・保坂本・國學院大學藤樹本

○為秀本〈2〉の本文「京大五冊本本文をベースにしつつも、宰相中将妹をまったくの出来損ないとする（i）を排し、その代わりに他本から（G）（I）を取り込んでできたもの」……大島本〈2〉

注

\* 1 『講座平安文学論究 第十六輯』（平成十四年5月）

\* 2 注1に同じ。

\* 3 「狭衣物語卷四伝本考」（上智大学 国文学論集4）昭和四十五年11月）

\* 4 『物語文学の本文と構造』（平成九年4月）第Ⅱ部

\* 5

- ・人やりの道ならなくにおほかたは生き憂しと言ひていざ帰りなむ（古今集・三三八）
  - ・おほかたは我が名も湊漕ぎ出でなむ世をうみべたにみるめすくなし（古今集・六六九）
  - ・寝ても見ゆ寝でも見えけりおほかたはうつせみの世ぞ夢にはありける（古今集・八三三）
  - ・おほかたは月をもめでじこれぞこの積もれば人の老いとなるもの（古今集・八七九）
  - ・おほかたはなぞや我が名の惜しからん昔のつまと人に語らむ（後撰集・六三三）
  - ・おほかたは瀬とだにかけじ天の川深き心を淵と頼まん（後撰集・九五七）
  - ・おほかたは峰も平らになりなん山のあればぞ月も隠るる（古今六帖・三四四）
  - ・見ても思ひ見ずとも思ひおほかたは我が身ひとつや物思ふ山（古今六帖・九一二）
  - ・おほかたは誰が名か惜しき袖しみてゆきもとけずと人に語らむ（実方集・一一〇）
- \* 6 『実践女子大学紀要』（昭和五九年3月。のちに『狭衣物語の研究「伝本系統論編」等間書院・平成二二年刊に収録。本稿での引用は後者に拠る）

\* 7 『狭衣物語諸本集成 第一巻 伝為明本』（平成五年10月）の解説。五〇四頁。

\* 8 『狭衣物語諸本集成 第六巻 飛鳥井雅章筆本』（平成十年9月）の解説。四七二頁。

\*  
9

狭衣が宰相中将妹を源氏宮に似ていると考えるか、似ていないと考えるか、という相違は、今回採り上げた箇所以外のところでも同様の異文を発生させている。これは、本文の取り合わせというきわめて厄介な問題を解明する重要な鍵となるに違いない。稿を改めて論じるつもりである。